

パブリックスペースを活用した小企画  
A project utilizing the Center's public area

# NACT View 03

渡辺 篤 (アイムヒア プロジェクト)  
Atsushi Watanabe (I'm here project)  
私はフリーハグが嫌い | Hate Free Hugs



2023年9月13日 [水] - 12月25日 [月] 2023.9.13 [WED] - 12.25 [MON]





《私はフリーハグが嫌い》 上：表側／下：裏側、2023年、バックライトフィルム、ライトボックス、ドア、木材ほか



# インタビュー：渡辺 篤（アムヒア プロジェクト）

聞き手： 山田由佳子（国立新美術館 主任研究員）

2023年 9月 14日

——今回のNACT View 03では、渡辺さんが2021年から続けているプロジェクト「私はフリーハグが嫌い」に基づく作品を発表していただきました。このプロジェクトは、ひきこもり経験を持ち、孤立・孤独問題に取り組む渡辺さんの呼びかけに対して応募したひきこもりの方に、渡辺さんが福祉従事者の方と共に会いに行き、ハグと対話をするというものです。まず、プロジェクトに至った経緯を教えてください。

私はこの10年、孤立・孤独の社会問題に取り組んでいます。そのため、当事者やその周囲から相談の連絡もしばしば貰います。数年前、友人から「知り合いのひきこもりが SNSで、ずっと“寂しい”とつぶやいてるから何かしてあげられないか」と相談されました。彼は長期ひきこもりで、福祉には全く繋がってない様子。私はどうすれば彼と会えるか考えました。ただ、現実的には私の住む横浜から彼の住む九州までの移動費や、対面までには様々な準備が必要です。そこで、助成金の申請を考えました。私のプロジェクトは、作り手の机上の空論でスタートするわけではなく、このように具体的に会うべき人がいたり、現実的な課題と直面したりして立ち上がります。今回はそれ故に参加者募集において「日本国内であればどこでも行きます」と発信しています。コロナの深刻さが今後どれくらい続くか全く見えない最中、プロジェクトを立ち上げる際、アフターコロナにスキニップが再開する未来について考えました。一時は社会全体が「ひきこもり化」した状況になったことで、持続的に孤立せざるを得ないひきこもりや障害者施設に居続けるような人に対しても想像する力が沸き起こったように思います。しかし、コロナ収束後の社会では、孤立下にある人々のことをまた想像しづらくなる感じたのです。多くの人々は他者に対し優しくありたいと願っているでしょう。しかし、直接出会えたり、痛みが目に見えて分かる相手には意識を向けられる一方、想像し得ない向こう側にいる存在のことは無いことにされがちです。しかし、この社会はそうした人々と共にあります。見えない場所に居る人こそ、社会包摂が向けられるべきですが、現実には複雑です。彼らの中には、より深い孤立や生きづらさをセルフネグレクト的に選ぶ人さえ居ます。医療や福祉の多くは、姿の見える相手にしか機能しません。他方で、宗教や哲学、そしてアートはそうした「出会えなさ」や「わからなさ」を持つ存在に対しても、想像力を介した接続可能性があると思います。私はアートの文脈のために作品を作っているのではなく、社会運動やソーシャルデザインの手法としてアートを用いています。こうしたアートの転用



《ここに居ない人の灯り》2021年/2023年、LED、ライトカバー、スマートプラグ、Wi-Fi、スマートフォン、見守りカメラ、アムヒア プロジェクト蔵

こそ、アートの拡張や美術史の発展に必要なことだと考えています。

——今回のプロジェクトでは「嫌い」な「フリーハグ」をあえて行っていますが、なぜ「フリーハグ」をするのか教えてください。

フリーハグはオーストラリアやアメリカ発祥で、YouTubeが立ち上がり始めたころ（2000年代後半）日本でも知られるようになりました。フリーハグが流行り始めた当時、私は渋谷で路上生活者と生活を共にしながら活動をしていたこともあり、フリーハグをしばしば見ていました。当時も今もやっぱり苦手です。渋谷に居てハグができること自体、ある種の優位性があるようにも感じてしまいます。ハグ文化の無いこの日本でスキニップを人前でするのは「リア充」の象徴的アクションというか。一方で、フリーハグ自体もさまざまに展開し、日韓問題やジェンダーフリーに向き合った実践もあり、全否定はしていません。ハグが醸成する空気は、友好や非暴力です。しかし、出会えただけにしかアクションを出来ないこの取り組みは、社会包摂の抱える矛盾や限界にも重なると感じたのです。

——今回はそのプロジェクトをもとにした4点の作品を発表していますね。それらについて詳しく聞かせてください。

私は以前、某市の成人式のアドバイザーをしたことがあります。市が抱える課題は、ヤンキーが壇上に向かってくること、そして、ひきこもりを含む一定数が式に参加しないということ。結局、実際

の式では、席の配置を変えるなどヤンキー対策には取り組んだのですが、来ない人への対応はおざなりにされました。いつだって、姿の見える人や課題には意識は向けられますが、姿の見えない人への優先順位は下げられがちです。彼らに対し社会は「自己責任」として切り落としているようにも感じます。美術館も「市民と共に」というムードを作る一方、来ることのできない人に意識を向ける機会はなかなか無いと思います。場を共にし、共に作品を愛でることが大前提となっていて、不在者について想像したり、来ることができた者たちの特権性に気付いたりする機会は少なかつたと思います。

一方で、私が大きな影響を受けたのは、ひきこもりの当事者運動です。ある対話型のイベントでは、「ここに居ない人のためのテーブル」というものを必ず用意していました。6〜7つのテーブルごとにお題を決め、参加者がそれぞれの卓で対話する際に、不在者のためのテーブルも用意するのは、あえて誰も着席しないテーブルです。よく誤解されますが、ひきこもりは必ずしも全く家から出ないわけではなく、そうした心理的安全が保たれた会になら来られる人も一定数居ます。そしてこのイベントでは、自分だけ回復できればいいということを超え、その場に来ることさえできない、自分と似た事情を持つ人が、見えないどこかに確かに居る、ということについても思いを働かせていたのです。こうした当事者たちによる取り組みとの出会いは私にとって衝撃でした。ともするとナイーブな彼らたちが、その繊細な想像力を活かし、痛みを持った者同士の繋がりの中で、社会を今この場所から変えようとしてたのです。自作《ここに居ない人の灯り》（2021年）は、私が触



経歴

1978 神奈川県生まれ  
 2007 東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻 卒業  
 2009 東京藝術大学大学院美術研究科絵画専攻(油画) 修了

大学を出た直後から、足掛け3年に及ぶ深刻なひきこもりを経験。復帰後は、精力的に活動を続け、社会的事象やそれらを取り巻く状況を批判的に捉えたプロジェクト形式の作品が多い。2018年より、孤立・孤独当事者らとの協働を行う「アイムヒアプロジェクト」を主宰。

近年の主な展覧会は「あ、共感とかじゃなくて。」(グループ展/東京都現代美術館、2023年)、国際芸術祭「あいち2022」(グループ展/愛知芸術文化センター)、「瀬戸内国際芸術祭2022」(グループ展/香川)、「同じ月を見た日」(個展/R16studio、神奈川、2021年)、「2020 Asia Project-Looking for Another Family」(グループ展/国立現代美術館、韓国)など。2020年度「横浜文化賞 文化・芸術奨励賞」。



※作家プロフィールの詳細と本インタビューの英文は以下のHPをご参照ください。

For more information on the artist and an English translation of this interview, please see the following website.



[https://www.nact.jp/exhibition\\_special/2023/nactview-03/index.html](https://www.nact.jp/exhibition_special/2023/nactview-03/index.html)

NACT View 03 渡辺 篤(アイムヒアプロジェクト)

私はフリーハグが嫌い

国立新美術館 1Fロビーほか  
 2023年9月13日(水) - 12月25日(月)

学芸担当

国立新美術館 | 山田由佳子(主任研究員)、吉村 麗(特定研究員)、室屋泰三(主任研究員) 下司悠太、駒木崇宏、深澤 満、神原由佳、鳥居 萌、高島純子、松浦奈美、池田麻紀子、小川真理子、石井香葉子、渡辺政子、小泉明郎、株式会社 泰有社、プロジェクトに応募いただいたひきこもりの方々

撮影

井上桂佑(P1、P3、P4の上二点)

翻訳

クリストファー・スティヴンズ

印刷物デザイン

岡崎真理子+田岡美砂子+田中ヴェートリ美南海(REFLECTA, Inc.)

印刷

八紘美術

発行日

2023年11月20日

発行

国立新美術館



《ここに居ない人のためのフリーハグ》2023年、ビデオプロジェクション、60分...炎天下、渋谷駅前で連続10時間撮影した映像。

れてきたこのような当事者運動からインスピレーションを得ています。「ここに居ない人」も参加できたり、居ない人について鑑賞者が話し合い、想像することの機会を、作品を通して提起しています。

ここ10年くらい、生きづらさを持った人々の当事者運動は盛り上がりを見せてきました。そこでは、革新的とも言えるほど様々な気づきが改めて言語化や体系化されています。例えば「自立とは依存先を増やすことである」(※)などもその一つ。SNSの発展により様々な立場や当事者ゆえの声が発信されて、議論されてきたと思います。生きづらさの立ち位置から発せられる言葉は、今まで気づきづらかった視点です。それらは、生きづらさを減らしたり付き合ったりしていくヒントの宝庫だと思います。

※熊谷晋一郎(東京大学先端科学技術研究センター准教授)による言説。

NACT View 03の展示空間はいわゆるホワイトキューブでなく、人が往来する場所です。展示依頼を貰った時、そうした空間でどのように来館者の注意を向けられるかというお題を出された気がしました。しかし私は、あえて反対の、「わかりづらさ」や「見えづらさ」をテーマにしました。映像作品《ここに居ない人のためのフリーハグ》は渋谷駅前で撮影したのですが、私の目の前を通り過ぎる数十万という人々には全く届かないパフォーマンスをずっとやっています(笑)。連続10時間、見えない誰かに向けて一人孤独にパフォーマンスをしています。タイムラプス撮影したその映像を美術館のレストランコーンに投影することや、ドアをモチーフにした造形物から成るインスタレーション《私はフリーハグが嫌い》を美術館のオープンスペースに展示することも、それとよく似た状況を作り出します。つまり、いずれも多くの人がそ

の前を通り過ぎ、「よく向き合わないとほぼわからない」、「気づかずに見過ごしてしまう」という状態をわざと作り出しています。ちょっと意地悪ですね(笑)。この《私はフリーハグが嫌い》におけるドアの面は、分からない向こう側があるという象徴性を持っています。そして、自ら向こう側に周り込まないと気づけない存在があるのです。

私は、これまでの現代アートが社会課題を扱ってきた舞台裏には、当事者を搾取や利用してきた部分があると感じており、そのことに非常に批判的です。例えば、2018年に写真家のアラーキー(荒木経惟)によるそれまでのセクハラ問題が告発されて話題になった件は、私が同年にアイムヒアプロジェクトを立ち上げる上で一番きっかけになった出来事です。これまで舞台裏とされがちだったリサーチや制作期間などのプロセス自体の質を見直し、新しい方法についても考えていくようになりました。今、私にとっての活動の主軸は、当事者と交流することと言えるでしょう。募集型による参加者の主体的参加(こちらから肩を叩かない)。規約の提示や合意形成を経た上での心身の安全確保。利益の分配。そして、展覧会や作品制作は勿論大事ではありますが、それらを目的だとして他を疎かにするような形ではなく、展覧会は所詮アーカイブの提示のような位置づけとも考えてもいます。やはり当事者との対話などに重心を起きたいのです。美術館やアートのスペースの中で、アートファンや関係者だけが開催期間だけ盛り上がり、社会問題を消費し、実際の当事者環境のその後の変化には興味を持たない。そんなこれまでの構造を批判し、美術館の外にこそ現実があることを改めて気づき直すための展示を、ここ(美術館)でやるということが私の今回の課題なのです。



《私はフリーハグが嫌い(ビル屋上でのアクション)》2023年、ビデオプロジェクション、60分...屋上から住宅街を見渡し、見えづらい場所に居る人々を想像する。